



仲間とともに physician-scientistとして

福本 毅

京都府立医科大学大学院医学研究科皮膚科学教授

私が後輩に伝えることができるものはなんだろうと考え、physician-scientistとしてのキャリアを目指してきた経緯で、私なりに学んだことをお伝えしたいと思います。

私は若手皮膚科医時代に、臨床医として皮膚アレルギーと皮膚外科の2領域を極めたいと思い、臨床医としての研鑽を積んでいました。しかし、日々の診療の中で治しきれない患者さんに会い、治療法の限界や病態不明の疾患に悩む中で、湧き上がる「なぜ?」という問いに突き動かされ、前神戸大学皮膚科教授である錦織千佳子先生の導きにより、研究の道へと足を踏み入れました。私が研究を開始したのは皮膚科医5年目ということで、とても遅いスタートでした。しかし、臨床医としての経験があったからこそ、難治性疾患の病態を解明して、治せなかった患者さんに新しい治療法を届けたいという強い想いをもつことができたように思います。

大学院では悪性黒色腫の発症機序解明の一端として、色素細胞に特異的な紫外線応答を解明する研究に取り組みました。米国ウィスター研究所でのポストドク時代には、がん進展に関わる細胞老化とエピジェネティクスを学びました。帰国後は現神戸大学皮膚科教授の久保亮治先生のもとで、

physician-scientistとして患者さんに還元できる創薬研究を目指してきました。

私が研究を経験して得たもっとも大きな学びは、「臨床と研究のどちらか一方だけでは、患者さんに真に寄り添うことはできない」ということです。病態を深く理解し、その知見を現場に還元することで、ようやく目の前の患者さん1人1人に、新しい光が差す。私はこの姿勢を、physician-scientistとしての信念としています。

若手の皆さんには、ぜひ目の前の患者さんの診療に、限界をつくらず挑んでいただきたいです。全力で向かう臨床の中から自分なりの問いをみつけ、それを研究で解明して、そして臨床に還元してほしいです。臨床と研究は必然的に両輪になると考えています。

忙しい日々の中で、physician-scientistとして臨床も研究もやり続けることは大変なときもありますが、志を同じくする仲間となら、不可能はありません。素晴らしい仲間とともに、皆さんが切り拓いていかれる皮膚科学の未来に期待しております。